



もりぐち みつる

1962年千葉県生まれ。千葉大学理学部生物学科卒業後、自由の森学園中・高等学校の理科教諭。2000年より沖縄に移り住み、フリースクール「珊瑚舎スコーレ」の活動等に携わる。「ぼくは貝の夢をみる」(アリス館)「教えて、ゲッチョ先生! 昆虫の? が! になる本」(山と溪谷社)「どんぐりの謎」(どうぶつ社)「ぼくのコレクション」(福音館書店)「骨の学校」(木魂社)など著書多数。

夏のてら子屋の感想文で、多くの子どもが話題にしている「げっちょ先生の理科教室」。

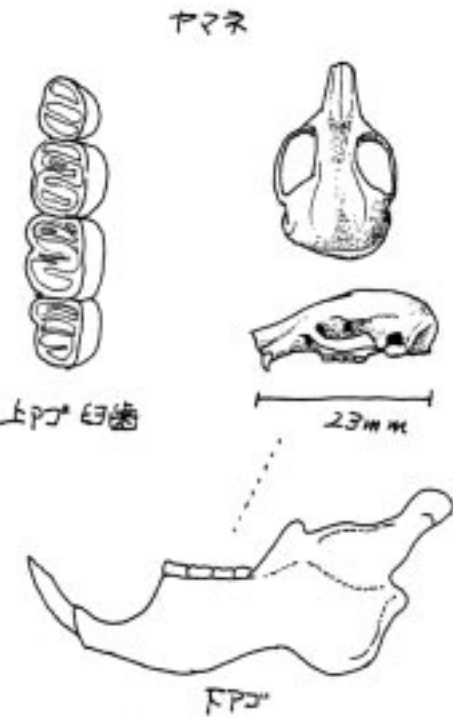
げっちょ先生こと盛口満さんの、大きなリュックの中から次々に取り出される「骨」は、子どもたちをワクワクさせた。

「虫、動物、石、植物のこと、なんでも答えてくれる」。

子どもたちの、げっちょ先生というホンモノへの安心と信頼が学びの場を熱くさせた。

沖縄に帰ったげっちょ先生が発行する「かまきり通信」にて、てら子屋での5日間を見つけた。

from Mitsuru Moriguchi in Sango Shya  
Natural History of Mantis eye



## かまきり通信

2002年8月5日

### 盛口満

NO.411

サマーキャンプ4

「虫おじさん」と同時に、僕は「骨おじさん」でもあった。

「ねえねえ、ツボの中に骨あるよ。アタマ細長い。鳥かな?」

女の子の一人が、その声をかけてくる。雷雨の雨やどりをしていたときだ。

「ツボの中の骨?」

「何じゃそりゃ...と思う。しかもトリ?」

よくわからん。

言われるままに小屋の中に入る。うす暗い小屋の中で、窓のところに花びんとマホウびんが置いてあった。その花びんこそ「ツボ」だ。入口10cmほど、高さ30cmほどの花びんをのぞくと、確かに骨らしきものがある。

「何だろつねえ。トリじゃないよ」

そう言っ、プラスチックびんに入れてその女の子に見せる。

しかし、「これは何だかおもしろそう。もみくちやにされないうちにと、さつさとザックの中に放り込んだ。」

「このキャンプでは、僕は「授業」をすることになっていた。やっぱりザックに骨

を入れて持ってゆく。そしてトンソクの骨のクイズなぞをしてみる。

「骨ほしい」

やっぱりこんな声があがってくる。子どもたちは骨好きだ。

2日目。2回目の授業。ここでトリのアタマの骨を見せた。タチヨウの頭骨を見せて「何を食えると思っ?」

結構「虫」という答えが多い。ほかにサギやトビなどのアタマを見せて「クチバシと食性について少し話す。」

こんなのがあったから、「ツボの骨」にも目がいったのだろつ。多分、僕一人で小屋に入ってもゼツタイ気がつかないことだと思っけど。短い間でも、「授業」と「授業外」の時間を共有できたことが大きかったんだと思っ。コーディネーターのナカマさんが、「とにかくいっしょにずっといてください」と言っってた意味がようやくわかった。

さて、「この骨だ。気にはなつた。よくこの小屋に来るといつオニシ君はヒメネズミがよく入ってくる」と言っただけでヒメネズミにしてはアタマが丸っこい。それで気になつてそそくさとザックにしまひこんだのだ。

結果、ヤマネの骨だった(ヤマネ2つとジネズミ2つが入っていた)。

このところ、ネズミ類のアタマが気になつた。その中で、ヤマネのアタマをぜひ見てみたかった。というも、彼らはゲツ歯類なのにもかかわらず、昆虫食性が強いからだ。歯はどうなつているの?と気になつていたので。

思いがけず、そのヤマネの骨に出会つた。これが最大の謝礼...といえようか。